

- 東京国際映画祭
「アジアの未来」部門
スペシャル・メンション
- 香港国際映画祭
ヤングシネマ・コンペティション部門
「審査員特別賞」受賞
- トロント国際映画祭
コンペティション部門
グランプリ 受賞
- 上海国際映画祭
ASIAN NEW TALENT AWARD
出品
- パンアジア映画祭
「最優秀作品賞」
受賞
- エーテポリ
国際映画祭
出品
- グラスゴー
映画祭
出品
- ヘルシンキ
シネアジア映画祭
出品
- エコファンテ
環境映画祭
出品
- 全州
国際映画祭
出品
- 台北映画祭
出品
- ドイツ
日本映画祭
出品
- シンガポール
日本映画祭
出品
- ニューヨーク
ジャパンカット
出品

いやはひなたの
祖谷物語
 おくのひと



ポン・ジュノ監督など著名人、 映画祭、マスコミから賞賛の嵐！

一年間自分たちの想いを貫いた精神に感動した！！
最近の若者には珍しく、映画への覚悟がみえた作品だ。
木村大作(映画監督・カメラマン)

これは熱い思いのごもった映画だ。それがなによりいい。
佐藤忠男(映画評論家)

169分で長えーよ、とか思ってたけど、
観てたら終わってほしくなくなった。
映画らしさに満ち溢れた最高に幸せな時間。
俺もこっぴどい褒められたかったんだ、昔。
なんかすげえや最近の若いのは。脱帽。
中村義洋(映画監督)

心に湧いて何かじわじわと反動してくるものがあります。
ふだんの出来事で、これとこれってどこでつながってるんじゃない？
みたいなことも再体験させて。これって神業です。

魂の入った映画です。これこそ映画体験です。
山川直人(映画監督)

長い長い映画なのに、
たんたんとしんしんと物語と風景が心に折り重なっていき
最後の絵で解放感と感動を味わいました。
♪大きな玉ねぎの下で♪も嬉しくありがたかったです。
梨奈ちゃん神々しくしゃくしゃくランナー★(o)/★
サンブラザ中野くん(ミュージシャン)

「あまりに無謀な試みではないか」と予想していたが、
上映時間中、これこそが自然な映画作りではないか、とさえ思えて来た。
本作は映画は技術ではないことを証明する為に、
35mmフィルムと魂で挑んだ記録だ。
松江哲明(映画監督)

僕が祖谷に入った約40年前と変わらず、今でも若者は祖谷に何かを感じて
「住んでみたい、負けても戦ってみたい」という思いを抱きます。
それを思うと、この祖谷にはまだ強力な引力が残っているように思います。
この映画製作自体がそれを象徴する出来事のひとつだと思います。
アレックス・カー(東洋文化研究者)

若き映画人たちが自主製作の体制でありながら、
徳島県の山深い土地の四季を一年も期間を費やして撮影したこと自体が、
日本映画界への挑戦とも言える。彼らが同う共生や開発、
物質文明に対するアンチテーゼと共に描かれるのは自然の過酷さ。
それらは終幕を包み込む少女の微笑みが回答となり、
現代人が忘れかけた人生讃歌を奏でてゆく。
松崎健夫(映画文筆家)

こんな、アマノンの奥地のような秘境が、日本にあるなんて！
地方出身であるにもかかわらず、
映し出される風景の数々に純粋に驚いてしまった。
きっと、これ程までに勇敢で、
やりたいことをやり抜いている自主映画は、
これから先、他にないだろう。
横浜聡子(映画監督)

一見「感動の大作自主映画」のような外観をしたこの映画の裏には、
「シミュレアリスマティックな毒」が仕込まれている。
やや荒削りな「その毒の掛付け」をも楽しめれば、
アナタは「祖谷物語」の最上の観客だろう。
長谷川和彦(映画監督)

誰もが一度は作ってみたいと思う、自然と人間の権柄の大きな物語。
それがまだ二十歳代の監督を中心とした若いスタッフによって作られたのに驚かされた。
そのうえ、そいつは、こちらの魂を大きく揺さぶってくるころまで到達しているのだ。

次作を切り開く映画の誕生、そこに立ち会えた気がした。
瀬々敬久(映画監督)

山村の四季をフィクションで、それもシネスコの35フィルムで押さえる、
という映画作家ならば誰でも夢に見ているアイデアを案々と(では実はないのでしょうか)、
処女長編で達成してしまった監督の力技に拍手。
アクション女優・武田と舞踏家・田中の山人コンビもキレ良し。
上島春彦(映画批評家)

日本のアンダーグラウンドが、
都会主義と資本主義が抑えつけようとしている神秘的な田舎の景色の中で
生まれてくることを思い起こさせてくれる。
フランス映画雑誌「カイエ・デュ・シネマ」

萬の並外れた映像は華々しい過去の幻影と我々を向き合わせる。
つまりは、輪廻する日本映画である。
イギリス「テレグラフ」紙 五つ星評価(最高点) ★★★★★

器用さが重宝がられる“今”
「祖谷物語」のなりふり構わず映画に挑む器用さは特筆モノだ。
映画のおちこちに書いた穴から、
時代と真に向勝負した爽快な光が差し込んでいる。
萬哲一朗、極上の始動。
山本政志(映画監督)

感心しました。愚直に真っ向から映画制作と向き合っている。
大したものです。二人の登場人物の無言のリアレを貫いたこと、
その、演出の舞台骨にも好感を持ちました。
七里 圭(映画監督)

デジタル化が進む映画の世界で、
若し監督、スタッフたちの「フィルムで撮る！」という強い意思、
「現地で徹底的にロケをする！」という強い思い、
俳優陣がごみごみに応えている。映像の力、ここにあり。
寺脇 研(映画評論家)

ファンタジーと現実の境に位置するかのような祖谷とその荘厳な四季を
捉えた映像世界に終始圧倒されると同時に、アナログな映画だからこそ、
現実社会が確かに失ってゆくものを遺すことが可能ではないか、という
多重の意味合いに気付く。誠実な映画だ。
中井 圭(映画解説者)

今どきこんな無謀な挑戦をした萬哲一朗はスケールのデカイ稀代のアホであり、
祖谷の深山幽谷のごとき語り知れなさを感ずる。
彼の世界へ強引に惹き込まれた。
想田和弘(映画作家)

6月7日(土)～20日(金) 18:00より
2週間限定アンコール上映！

当日料金 一般1,800円/大学生・専門学生1,400円/シニア会員1,200円/高校生800円/中学生500円

ユーロスペース
EUROSPACE

渋谷区神宮前1-5 KINOKIHAUS 3F (渋谷区映画村前交差点左折)
03-3461-0211 | www.eurospace.co.jp

